

月刊

いじろのとも

第十二卷

二月号

殺身成仁

線路に落ちた人を
助けようとして
犠牲となった
韓国の留学生に
金大中大統領から
哀悼文が届いた
その中に
「殺身成仁」という
ことばがある
さすが儒教の国
これぞまさに
身をとじて
仁をおこなう
ということ

これが
思想を失った日本に
いま一番
欠けていること

危機打開の哲学欠如

人多く
日本の危機を
言うけれど
歯がゆきことよ
誰ひとり
真の哲学
示せぬことが

人生を考え直して

みたい人は（八五）

『正法眼蔵』解説（二九）

有時の巻を続けます。

大寂の道取するところ、余者（よしや）とおなじからず。眉目は山海なるべし、山海は眉目なるゆゑに。その教伊揚（きょういよう）は山をみるべし、その教伊瞬は海を宗すべし。是は伊（かれ）に慣習せり、伊は教に誘引せらる。不是は不教伊にあらず、不教伊は不是にあらず。これらともに有時なり。

山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず。山海の而今（にこん）に時あらずとすべからず。時もし壊（え）すれば山海も壊す、時もし不壊（ふえ）なれば山海も不壊なり。この道理に明星出現す、如来出現す、眼睛（がんぜい）出現す、拈華（ねんげ）出現す。これ時なり、時にあらざれば不恁麼（ふいんも）なり。

例によって、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させて頂きま

す。

大寂の右のことは、他のものということとは異なっている。ここに眉や目というのは、山や海を指している。なぜなら、山や海は、眉や目とは別のものではないから。つまり、かれをして眉を揚げさせると、山が見えよう。また、かれをして目を瞬（しばた）かせると、海が見渡せよう。「よい是」というのは、「かれ 伊 の身についている」とである。かれは、「・・・をして・・・せしむ教」にいざなわれていく。「よくない 不是」というのは、「かれをして・・・せしめない 不教伊」というのではない。「かれをして・・・せしめない 不教伊」は、「よくない 不是」ということではない。「不是」も「不教伊」もともに有時である。

山も時であり、海も時である。時でなければ、山や海は存在することはできない。山や海の「いま而今」に、時はないと考えてはいけない。時がなくなれば山も海もなくなる。時が不滅であれば山も海も不滅である。この道理のために、明星は出現し

たのであり、如来はこの世に現れたのであり、仏の眼の玉が現れたのであり、また、釈尊と迦葉（かしよう）との拈華（ねんげ）微笑（みしょう）も出現したのである。まさしくそれが時である。時なければこのようなことはない。

今回取り上げます部分は、前回の続きになっています。本来は、分けて取り上げないほうがいいのですが、スペースの制約上、こうせざるを得ませんでした。前回の部分をもう一度、側に置いて見比べながら読んで頂ければと思います。

まず、出だしの「大寂の道取するところ」ですが、これは、先月号の次の文章に対応しています。「有時は伊（かれ）をして揚眉瞬目せしむ、有時は伊（かれ）をして揚眉瞬目せしめず、有時は伊をして揚眉瞬目せしむるは、是、有時は伊をして揚眉瞬目せしむるは、不是」。この内容を敷衍（ふえん）しているのが、今回出てきました次の文です。「眉目は山海なるべし、山海は眉目なるゆゑに。その教伊揚（きょういよう）は山をみるべし、その教伊瞬は海を宗すべし。是は伊（かれ）に慣習せり、伊は教に誘引せらる。不是は不教伊にあらず、不教伊は不是にあらず。これらともは有時なり」。

なかなか、論理的には理解しがたい文章だと思えます。

たとえば、「眉目は山海なるべし、山海は眉目なるゆゑに」という文章は、「甲は乙でなければならぬ。なぜなら、乙は甲であるのだから」という構造になっています。これは、同語反復でしかありません。言いたいことは、甲と乙は等しい、ということだと思います。先月号で見ましたように、釈尊と弟子・摩訶迦葉（まかかしよう）との間の「拈華微笑」の伝説的故事からきている「揚眉瞬目」の「眉」と「目」は、禅宗祖師の達磨大師にとつては、インドから「山」や「海」を越えて中国にやって来たことに対応している、ということなのです。

ですから、次に出ています「その教伊揚（きょういよう）は山をみるべし、その教伊瞬は海を宗す（＝尊ぶ）べし」は、そのことを言っているのです。

次の「是は伊に慣習せり、伊は教に誘引せらる。不是は不教伊にあらず、不教伊は不是にあらず。これらともは有時なり」ですが、これも、前回の敷衍（ふえん）になっています。

この「是」は、「有時は伊（かれ）をして揚眉瞬目せしむるは、是」のことで、先月号で見ましたように、この「有時」という時間は、解脱の時間のことです。あらゆることを肯定する是なのです。それは、言葉で言えば「伊に慣習せり」となり、「伊は教に誘引せらる」とい

うことになりません。私の理論でいいますと、解脱によって無意識の中で、如来と煩惱が完全に統合されて、全ての行動が慣習となり、あらゆる行為が誤りなく、「」をして「せしむ（教）」というように、仏によって誘われ、導かれているのです。

次の、「不是は不教伊にあらず、不教伊は不是にあらず」の「不是」ですが、これは先月号の「有時は伊をして揚眉瞬目せしむるは、不是」のことです。

ところで、この論理構造は、通常の論理でも理解できます。つまり、「甲は乙ではない、乙は甲ではない」ということですから、言いたいことは、甲と乙は違うということです。

ということとは、不是は、「かれ（伊）をして「せしめ（教）ない」ということと同じではない、ということですが。言っていることの具体的内容ですが、たとえば、次のように考えることができます。

つまり、達磨大師の「拈華」を、「微笑」して受け取れないことは、大師の「不教伊」ではない、ということですが。そうした行為も全てが、解脱の境地からなされたことだということです。そこでは、弟子たちの器量が問われているのです。しかし、そうした凡夫の時間を過ごすことにとどまっている弟子を許すことも、また、「教

伊」なのです。たとえ凡夫であっても、始祖を信じ、則って生きようとする限り、そこでは、全てが許されるのです。

さて、後半出だしの「山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず。山海の而今（にこん）に時あらずとすべからず。時もし壊（え）すれば山海も壊す、時もし不壊（ふえ）なれば山海も不壊なり」ですが、これまでの説明で、もうご理解いただけるのではないのでしょうか。物理的時間は、人間の存在と無関係に経過していきますが、しかし、それが経過したかどうか、意識できる人間という存在がないかぎり、時間としての意味を持たないのです。ですから、ここで道元が述べますように、人間にとつては、あらゆる存在が時間的なのです。そして、時間を自覚する極致が、時間と無関係のようですが、あらゆる存在と自分が一体となる体験なのです。その時、自分が山であり、海なのです。そして、今が永遠となり、山海が不壊となるのです。

そうした境地、あるいは道理の中に、釈尊が悟りを開かれた時の明星が出現し、如来が出現し、眼睛（がんぜい）禅の本質）が出現し、拈華が出現するのです。

これが、時なのです。時でなければこうしたことは起こらないのです。

自作詩短歌等選

遊ぶかね欲しさに

昔でも

食べられなくて

殺人や

盗みを犯す

人はいた

でも最近

遊ぶ金

欲しさに人に

悪をはたらく

智慧のない日本人

日本人

知識はあっても

智慧がない

智慧は聖者の

教えなりけり

こころ痛む虐待記事

毎日の

ごとく出ている

子の虐待

目にするたびに

こころ痛みぬ

残酷を

残酷とさえ

感じぬか

母性の愛を

失いし母

耐える力の喪失

ストレスに

耐える力の

なかりけり

子ども親も

ばらばらになり

しつけの実態調査

文部省が

しつけの実態調査を

するという

その前に

親の側の

規範性の喪失調査を

したらいかがかな

他者をそこなう

他者性を

弱めた子ども

多くなり

見境もなく

人をそこなう

女のおわれ

男性の

気を引くために

よそ様の

赤子をさらう

女の哀れ

驕慢な現代人

現代人は
ますます
凡夫になってきているのに
その自覚がなく
逆に

ますます
賢くなっていると
誤解している
どこまで行っても
救われない
民主主義の世よ

遺体の商品化

遺体さえ
商品となる
資本主義
利益と選好
ここに極まる

重い医療ミス

医師たちは
人の命を
地球より
重いというのに
医療ミス
平気で犯し
人を死なせる

飢えたたましい

人間は
自己を追求するほど
たましいが飢え
ストレスが高まり
いやしが欲しくなる

なんと多くの人が
自分は
それを求めるのに
ひとつには与えないことが

それは
多くの人が
自己ばかりを
追求している
あかし

でも

そうするように
文部省が
教育方針を
立ててきたのだから

求めるだけ

やすらぎを
求めるだけで
あたえない
現代人の
エゴの現れ

自作随筆選

人間も身体という物体

平成十三年一月二十一日(日)付け毎日新聞の「時代の風」というコラムは、解剖学者・養老孟司氏の担当による、「『わからない事件』の背景 人間の身体も『自然』見失う」と題する記事でした。

読んで、この方が人間を「身体」としてしか捉えていないことに、あらためて驚きました。(でも、この方の専門が、「解剖学」であることを考えれば当たり前といえは当たり前なのですが)。それにしても、この記事は、相対な人間というものは自分を取り巻く環境に影響を及ぼしますが、それと同時に環境からも逆に影響をうけている、つまり、相互限定しあっている、ということを実に示していて、人間の本質についての見方すら、そうなってしまうことに、驚きを新たにしたのであります。

この記事の出だしの部分を、少し長くなりますが、引用してみたいと思います。

病院の准看護師が点滴に筋弛緩剤を入れて、複数
の人を殺したという事件の報道がなされている。動

機はそれなりにあるうが、どのような動機を当人が述べたにしても、ほとんどの人はそれが理解できないであろう。

世上にいわゆる17歳の犯罪にしても、中学生が質問したという「人を殺してなぜいけないの」にしても、理解できないといえは、多くの人が理解できないはずである。少なくとも私には理解できない、むしろそれ自体を理解する気もない。ただ、こうした事件のきわめて大づかみな背景については、以前から論じてきたつもりである。

こうした事件について、すなわに現象を見れば、ある共通点が存在することに気づくはずである。それは事件が、なんとなくそう思われているような、心に関わることではなく、具体的な身体に関わるということである。

以下省略しますが、これだけの文を読んでも、この方の基本的な考え方は、十分理解できます。いろいろコメントしたいことがあります。順次、見ていきます。

若者の犯罪の動機が理解できない、という点は後回しにして、まず「人を殺してなぜいけないの」という質問に答えられない、という点についてみてみます。この方のように人間を身体(物体)として捉えるなら、恐らく、

答えられないのではないのでしょうか。

現在、この方が言われるように、多くの人が、なぜ人を殺してはならないのか、がよく分からなくなっているのだと思います。民主主義、あるいは個人主義では、自分が殺されて困るのなら、相手もそうだから殺すな、あるいは、多くの人が、殺すことを悪いことだと思っているから、殺すな、といった程度になります。つまり、それは、相対な者が、自分を守る手段として、相対な他者に関わっているに過ぎません。

真の理由はそうではないのです。釈尊もキリストも、人を殺したり傷つけてはならない、と戒めています。それは、人間として「絶対な条件」だから、そうしているのです。これを欠いては人間としての意味を失うから、そうしなければなりません。

では、絶対な条件とは何でしょうか。それは、私が、繰り返し述べていますように、人間だけが「人の心を感じるころ」をもつようになったこと、私の理論に即して言いますと「自己」から「他己」が分離して、精神が二重性を帯びるようになった、ということ。人間は、「自分を思う心（＝自己）」の他に「他人を思う心（＝他己）」を持つようになった、ということ。ここに人間の絶対な条件があるのです。これを欠くとき人間は

他の相対な存在である「物質」や「生命」と何ら変わらない存在となってしまうのです。

日本人は、神や仏を失って、精神の二重性がなくなり、この方のように、自分が物質や生命に墮しています。

そのことが、若者の犯罪に最も鋭敏に反映しているのです。彼らは、大した動機もなく、他人を殺し、傷つけます。あたかも、物質や生命をそうするが如くです。動物愛護を言いながら、平気で動物の肉を食らう人たちと同様なのです。自分の好きな動物（人間）は、大事にしても、自分が手段とすべき動物（人間）は、食べるためなら情け容赦なく屠殺してしまうように、自分の目的達成のためなら、平気で他者を利用するのです。殺し、傷つけるのです。それは、この方が言われるように「多くの人が理解できないはずである」といえるものなのです。もっと言えば、この方のように「理解する気もない」ということになるのです。

そして、それを「心に関わることではなく、具体的な身体に関わる」とこととして、理解しようとするのです。それは、自分が人間であることを止めるということ。日本人が、いま、そうなっています。マザーテレサが言われたように心を貧しくして、動物と同様に、他者性を持ちえず、自分だけを追求しているのです。

荒れた成人式

各地で、成人式が荒れたことが、問題となっています。特に、私の住む香川県下、高松市での成人式の模様は、繰り返し繰り返し、テレビで報道されています。不名誉なことです。

成人式で、誰かを招いて講演をしてもらっても、その方の話を聞こうとしなくなっただことは、もう十数年以上も前から問題になっていました。でも、聞かないといっても、私語をしたり、居眠りをする程度でしたが、このところのは、もっと積極的に式の邪魔をしよう、としているように思えます。式のぶち壊しを楽しみ、そうすることを誇示しているように思えるのです。

これは何を意味しているのでしょうか。多くのマスコミに出ている、いわゆる知識人は、いろいろなコメントをしています。私は、的確に分かっている人を、寡聞にして知りません。

一番印象に残ったコメントは、式が余りにも形式化しているからではないか、というものです。なんとということ、と言いたい気分です。

実は、式、もっと言いますと儀式は、まさに形式その

ものなのです。式次第にのっとりて厳粛に行われてはじめて儀式なのです。その点、「お祭り」とは違います。

それは、式次第という規範に、参加者全員が従うことで、共同体意識を養成する行為なのです。そうすることで、一体感を感じ、社会性を再確認するのです。

ですから、成人式も、それに参加することによって、自分が成人の仲間に入ったことを意識し、社会の一員であることを再確認するのです。

なのに、なぜ、ここにきて、成人式が荒れて成立しなくなってきたのでしょうか。

それは、私の理論で言いますと、若者に「他己」が育っていないからなのです。一般の言葉で言いますと、他者性、社会性、あるいは規範性が育っていないからなのです。

ですから、彼らは「式次第」という「厳粛な規範」に従うことができないのです。そればかりではなく、いまや、規範性を持たないことが、恥ずかしいどころか、逆に自慢になるのです。したがう真面目な人間を軽蔑するのです。あるいは、漫才がするように、笑いものにするのです。こうした意味で、成人式が厳粛に行われえるかどうかは、その社会に「他己」が育っているかどうか測るバロメーターになっているのです。

釈尊のことば（九八）

法句経解説

（三二四）「財を守る者」という名の象は、発情期にこめかみから液汁をしたたらせて狂暴になつているときには、いかんとも制し難い。捕らえられると、一口の食物も食べない。象は象の林を慕つてゐる。

この偈のはじめにあります「財を守る者」といいますのは、中村元著テキストの訳注によりますと「パーリ文訳注に出ている物語によると、カーシー（＝ベナレス）の王が象師を送つて美しい（象の林）で捕らえた象の名である」ということです。

さて、この偈は何を言わんとしているのでしょうか。なかなか難しいのですが、私は、次のように考えたらいかげであるうかと思えます。

人間も、象と同じように、一種の動物ですので、もし動物に墮すれば、あの従順な象が、発情期には制しがたくなるように、自分を制することが難しくなる、ということなのです。

そして、だからこそ、象がその本性に従つて発情期に

は制しがたくなるように、人間も、その本性に従つて人間らしさを発揮し、自らを制することに、誰によつても制し難いほどに、励まなければならぬ、と言っている、と考えるのです。それが人間の本性だというわけですが、いま、現代人は、世界的に人間の本性を見失つています。民主主義の源流をなしたヨーロッパの思想家たち、ホッブス、ロック、ルソー、なども、人間の本性を自己の（権利の）追求においています。民主主義はその出発点において、動物と同様に自己を追求することを本性だとみなしているのです。

これまで、毎度のように書いていますように、人間の本性は、自己から他己が分化した点に求められるのです。動物には自己しかありません。したがって、自分を意識することができないのです。他己があつてはじめて、人間は自分を意識することができるようになったのです。その根本は「人の心を感じるころ」をもつようになつたからなのです。そうした動物にはない「ころ」を獲得した結果として、言葉や理性を発達させることができたのです。

その人間の本性を磨くことを、誰も制止することができないほど、ひたすらに精進するべきだと、この偈は教えているのだと考えたいと思います。

(三二五) 大食いをして、眠りをこのみ、ころげまわって寝て、まどろんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧(かて)を食べて肥り、くりかえし母胎に入って(迷いの生存をつづける)。

大食いをして、怠けている人は、繰り返す母の胎(子宮)に入って、迷いの生存を続けているようなものだという事です。

この偈はまさに、現代の日本人(欧米人もそう)に向けて言われているように思えてしかたありません。

私は、かつて、ある学生に、失礼をかえりみず「食う寝る肥る」というあだ名をつけたことがあります。その時期、丁度「食う寝る遊ぶ」というコマースヤルがはやっていたのをもじったものでした。かれは、よく食べ、よく肥っていて、いつ下宿に電話をしても寝ていました。宿題をだしても殆どやってきませんでした。

この偈を読んで、彼のことを思い出しました。思えば、何だか現代人の代表のような人でした。

日本人は、現在、飽食暖衣で、日常生活でほとんど不自由を感じていないのではないのでしょうか。お金を持っているのに、消費が伸びず、経済が活性化しないと、財

界人は嘆いているのが、そのことをよく表しています。

人間は、経済的に豊かになるほど、それに反比例するかのようになり、ここが貧しくなっています。

ある社会学者の本に次のような記述があります。「一般に生きるということが、どんな生でも、最も単純な喜びの源泉である」というものです。

おそらく現代では、多くの人が、こう考えているのだと思います。経済的に豊かになって、生きていることが、単純に喜びの源泉になっているのだと思えるのだということ事です。

釈尊は人生は苦だと言われました。私たちが、どんなに貧しくとも生きていることが喜びだと思えるためには、苦を媒介として行う修行がいるのです。それは、自分が生きている意味を見つけることでもあります。そのためには、修行がいります。そうした修行を通じてはじめて、「絶対自己の自覚」が得られ、生きていることが喜びとなるのです。

経済的に豊かになって、驕慢になり、苦を体験することが少なくなると、欲望を満たすことが、人生の喜びにならなくなっていきます。偈にある通り、まるで豚のようにです。それは、無明の闇をさまよう、迷いの生存を続けることである、と言えるのです。

後記

一、今年は雪が多いようです。讃岐でも、少しですが、何度か雪が舞いました。

二、道元の『正法眼蔵』解説は難しいでしょうか。やさしくしようと思うのですが、なかなか思うようにいきません。何度も読んで頂ければ、得るものがあるのではないのでしょうか。なにせ、この『正法眼蔵』の中でも、もっとも難しいのが、いまやっています「有時の巻」ですから、しかたないようにも思います。なにせ、時間論は哲学の中でももっとも難しい分野で、哲学者の中で、本当に理解できていると思える時間論を書いた人に出会ったことがないほどですから。

三、このところ、また、二大精神病である精神分裂病と躁鬱病に関する本を少し読んでいます。それは、次の仮説を調べるためです。

四、その仮説とは、次の三つです。 基本的に分裂病は他己障害、躁鬱病は自己障害である。 男性は自己機能優位で、女性は他己機能優位である。 二つの仮説から分裂病は男性に多く、躁鬱病は女性に多いと考えられる。

五、本を読んで分かったことですが、確かに躁鬱病は女性が七割で、仮説通りでした。でも、分裂病は男性が少し多い程度でしたが、ただ、男性の方が、早い年齢で発

病する傾向があり、そして症状が重篤で、予後が悪いという結果でした。女性は男性に比べて遅く発病し、予後がよく、治る割合が大きいということです。

六、分裂病は、文化の影響をかなり受けますので、そのせいで女性も結構、発病しますが、軽いようです。ですから、仮説が否定されたわけではありません。

七、また、私は、大脳の左半球が他己脳、右半球が自己脳だと考えていますので、分裂病患者では左半球に障害があるのだと思っています。このことは、まだ充分確認していませんが、脳波・MRI研究などで、おそらく立証できるのではないかと期待しています。

月刊 こころのとも 第十二卷 二月号 (通巻 一三四号)	平成十三年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

